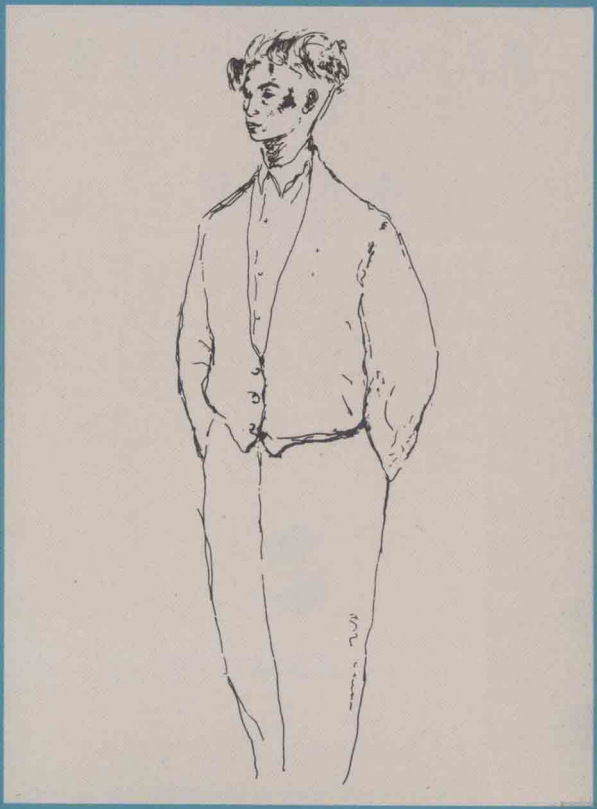
堀田善衛

若き日の詩人たちの肖像

下



集英社文庫

集英社文庫

若き日の詩人たちの肖像(下)

1977年10月30日　第1刷
1991年6月20日　第5刷

定価はカバーに表示してあります。

著者　堀田善衛

発行者　若菜正

発行所　株式会社集英社
東京都千代田区一ツ橋2-5-10
〒101-50
電話　東京　(3230) 6100 (編集)
(3230) 6393 (販売)
(3230) 6080 (製作)

印刷　大日本印刷株式会社

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

落丁・乱丁の本が万一ございましたら、小社製作課宛にお送りください。
送料小社負担でお取り替えいたします。

© Y. Hotta 1977　Printed in Japan

ISBN4-08-750062-4　C0193

集英社文庫

若き日の詩人たちの肖像
(下)

堀田善衛

集英社版

目次

第三部……六
第四部……二六五
作者からの挨拶……四〇三
解説　篠田一士

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

若き日の詩人たちの肖像（下）

第三部

むかし、をとこありけり。そのをとこ、身をえうなき物に思ひなして、京にはあらじ。

——伊勢物語——

"And then there were none."

かくて誰もいなくなった。

——アガサ・クリスティ——

さて、若者はほんの五年ほどのあいだに、十六、七カ所も転居をした。下宿やアパートを、靖国神社裏の、富士見町にあった次兄の下宿からはじめて、青山、下北沢、麻布宮村町、向島は寺島町から、下谷、築地、目黒、大森、代々木、中野、杉並一帯などと、ときには同じ地区で二度も三度も転居をして、しかも時とともに食い物が窮屈になって来て、とうとう阿佐ヶ谷の長兄の家に逃げ込んだという顚末はもう申し上げたのだったが、この阿佐ヶ谷の長兄は、運漕業なるものを見習うために大阪港で働いていたものであった。けれども、もはや先祖代々の廻船問屋をや

りなおすなどということは、これはもう不可能であった。裏日本の港々にあった古い廻船問屋は、ほんの一、二の例外を除いて、悉くつぶれてしまっていた。官の金、つまりは税金を何等かの方法で利用出来なかったものは、みなつぶれてしまっていた。汽船というものは、実に莫大な金のかかるものである。つくるにも金がかかれば、動かすにも金がかかり、しかも動いて何かの荷物を運んでいるあいだはまだいいのだが、いったんこれが停ってしまうと、つまり荷がなくて繋船ということになると、まことに始末におえない。和船ならば陸に揚げておけばよいが、汽船は陸揚げも出来ず港にじっとさせておいても、エンジンをとめてしまうわけには行かないのだ。しかもエンジンをかければ石炭も油もいり、それでいてじっとしていれば船腹は錆びて来る。錆がひどくなると穴があく。船底には貝殻や海草がつく。放っておけば、いざ出航したときに速度が鈍る。大勢の船員にも金を払わなければならない。保険料もかさむ。所詮小資本でやって行けるものではなかった。長兄も自立出来る見込みのないことをやっていても仕方がなかった。記録のあるところだけで二百年にわたる家業は、これで完全に終了、ということであった。長兄は大阪を引揚げて、三鷹に新たに出来た航空機部品製造の会社に入りなおした。そのことが決定したとき、借家の設定をもかねて若者の母親が上京して来た。そうして長兄と、電力会社に入った次兄と若者との三人をあつめて、一度だけ、母親は短く、泣いた。母親は、自分の代に二百年以上は継がれて来た家業が完全に終了したことについて、簡潔なことばで無念に思う、と言って、拳をかためて、その拳で泪をぬぐった。若者は、女もまた拳骨をかためて泪をぬぐうものか、と思い、母が切腹をするのではないかと心配をした。が、そういうことはなくて、あとは淡々としてすぐに北国へ帰って行った。母親は大正のはじめ頃から、女仲仕や工場で働く女工たちのための託児所を

経営していて、そのことで忙しかったのである。そうして長兄は、毎日毎日、夜は十時頃まで働いて、くたびれ果てて戻って来た。細君は少し結核の気があるのとゼンソクとで弱かった。おしゃれの次兄は、学生時代にはスキーを筆頭にしてダンス、麻雀、撞球、競馬と、遊びごとには天才的な才能を見せたものであったが、そうそう遊んでばかりもいられなかった。これが、たとえば英国でのことであったとしたら、この次兄はおそらく一生のあいだ、如何なる職業にもつかず、如何なる労働も決してしないといったふうなものであったろう、と若者は思っていた。次兄も結婚をして、長兄の家のすぐそばに、マドンナのそれとほとんど同じような小さな家を見つけた。そうして、長兄の細君は弱かったので、いまは未亡人になった母の姉が手伝いに来てくれた。この伯母は、中学生の若者が金沢の楽器運動具店にいたときに、二百九十羽の小鳥を飼っていた畸人に嫁いでいたものであったが、伯父が亡くなってからは子供がなかったこともあって、まるで放浪児のようにひとりで京都、奈良、伊勢、尾道、興津などで住み、その頃は若者の郷里へ戻っていたものであった。母の姉であるから伯母なのだったが、家の者の誰からもお婆さんと呼ばれて尊ばれていたから、ここでもお婆さんと呼ぶことにしよう。

この明治六年生れ、六十八歳のお婆さんが家の長女なのだったが、家は末娘であった若者の母が婿とりをしてついでいた。母系家族、つまりは代々、女が家をついで行くことになっていて、若者にも家をつぐ筈の一人の妹があったが、これは早逝していた。男に家をつがせるよりも、船頭たちのなかから豪胆で、しかも采配を振る才のある男を選び、婿にした方が有利だったのだ。

お婆さんは小学校は二年までしか行っていなかった。小学校というものが出来てそこへ行くことになったものであったけれども、家の者どもがその義務教育なるものの教育内容を調べてみて、

それが家訓に比べてあまりに程度の低い、どうにも低級なものであったので、二年で早々に引かせてしまったものであった。それ以後、学校と名のつくものには行ったことがなかった。教育の一切は、家でまかなわれた。学校と名のつくものに行ったことはなかったが、英語も、阿佐ヶ谷の家へ来てからでも充分に読めた。若者の家では、父がかつてロンドン・タイムズをとっていたので、父、母、それからこのお婆さんが、この三、四カ月遅れの英国の新聞をまわし読みをしていた。それは、その頃の日本としてもかなりに珍しい景であったかもしれないにしても、シナの読書人の家などでは珍しいことではない、とお婆さんがかつて言ったことがあった。そういう話を、おそらく家の船頭――新しいことばで言えば船長――お婆さんはカプテンと言っていたが――から聞いたものであったろう。北海道の昆布と、そこらここらから掻きあつめて来たナマコの乾物は、天津と上海でよい値で売れるものであった。お婆さんは若かった頃には、翻訳までしていた。それは、長い長い巻紙に墨書されたもので、題して『頓奇翁物語』という、ドン・キホーテ物語であった。幼かった頃の若者たちの兄弟は、この金沢のお婆さんが家に帰って来て、長い長い巻物をくりながらこの『頓奇翁物語』なるものを読んでくれるのをたのしみにしていた。スペインはラ・マンチャの貧乏貴紳、「量においては羊肉より牛肉の方優れる煮込を食い、非違は打つべく、非行を正し、没理、顕正すべし」とする頓奇翁は、彼らの兄弟にとって幼年期から耳に親しいものであった。お婆さんはその英語教育を、明治の二十年代に、家に次から次へとやって来た民権自由の壮士たちから受けたものであった。

だから、阿佐ヶ谷の家へ来てからも、洗濯などをしながら、不意と、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

〈政府の心はあかるくあろが
　国の自由はしんのやみ
　あかるくするのが国事犯
　イツマア光を見るであろ　ヒヤヒヤ

〈民の敵なる圧制政府
　国賊うちとりませうかノウ
　大井、稲垣、新井に景山みなすすめ
　革命せうと打出いたね　ヒヤヒヤ

などという、猛烈な唄をうたい出して若者をさえも呆然とさせることがあった。ここにうたわれた大井、稲垣、新井、景山という人名は、大井は大井憲太郎、稲垣は稲垣示、新井は新井章吾、景山は景山英子（のちの福田英子）であり、いわゆる大阪事件という名で呼ばれる爆裂弾事件の被告たちであった。このうち、稲垣示の妻はお婆さんの伯母にあたっていた。お婆さんは彼らだけではなくて、これらの人々が運動資金を求めて家に逗留していたときに、次々に彼らから英語を習ったものであった。常山紀談を英訳したこともあり、若者たちの兄弟が中学校に入り、英語を習いはじめたとき、わからぬところはお婆さんに聞けばよく、

「和文英訳はやな、和文でやったらあかんがやぞいね。漢文英訳で稽古するががいちばんながやぞいね。漢文をな、反り点なんぞつけんで、そのままあたまからなおして行きゃ、そのままで英

文になるがやぞ。そやから、英語上手になろ思うたら、漢文をしっかやらにゃダチャカン（駄目）がやぞ」

と教えてくれたものであった。それは実際的で適切なアドヴァイスであった。そういうふうにして、英語を一種の漢文として、お婆さんは民権自由の志士たちから習ったものであった。

そうして、このお婆さんとは二十ほど年下の若者の母は、故郷の町としてはじめて金沢の女学校へ上った人であった。母はなんにもいらないから高等教育だけは受けさせてくれ、と言ったものであった。

世話をしてくれに上京して来たお婆さんをめぐって、こういう情況があった。だからお婆さんは、若者の留守のあいだに二階の若者の部屋へ入り込んで、彼のもっている本を片端から読んで行った。それは、本でありさえすればなんでもよいらしく、しかもどんなものでも読んでしまってけろりとしていた。すでに六十八歳であったが、子供を生まなかったせいもあってか、細面な顔の色もよく、つやつやしていた。たとえ背中が少しまるくなって来ていても、年老いて妹の子供たちの世話をさせられているといった、惨めさはいささかも感じられず、夜なかに若者が散歩に出ようとすると、二階の隣室に寝ていて、

「ホエヤ、ドウ、ユウ、ゴオ、や。ポリス、アテンションやぞ」

などと声をかけた。

しかもこの阿佐ヶ谷の家は、お婆さん、兄夫婦、若者の三つの単位が、完全に各人独立採算、自治制によって運営されていた。お婆さんは家から送金をうけ、兄夫婦は給料によって、そうして若者は、この頃では三分の二ほどは独立してやっていた。それぞれが金を出しあってやってい

た。若者は、月末には澄江君の紹介で、澄江君の亡父と関係の深かった出版社の雑誌の校正を手伝い、また赤鬼君の紹介で有楽町の川岸にある映画館邦楽座の、映写幕のすぐ裏に、川っぷちにはりついたようにして寄生していた映画雑誌の社に、午後の四時から六時まで毎日学校がおわってから勤めていた。そうして足らぬところは、その年の春に家からかついで来た、茶室用の、寛永三筆の一人、松花堂昭乗の書いたといわれる文字板が、これが意外に高値がついていたので、そこから補っていた。父も母も、

「多分、贋物やろね、墨の色がわるいわ」

と言っていたものだったが、池の端の道具屋は本物だと言ってきかず、

「売らん方がええです。あんた、なんでも贋物やろ言うてもって来なさる。わるい癖や」

と言うので、売らずにあずけておくことにして、道具屋から足らぬ分の金をとってくればよかった。

出版社では、若者は二つの大失敗をした。失敗――いや、むしろそれは意識的な失敗というものであるかもしれなかった。前者では、保田与重郎の原稿の校正をしていて、原稿に〝精神性〟とあるものが、ゲラでは〝精神病〟となって出て来た。若者は、この保田という人の、言語を拷問にかけたような、しかもこれこそが上方風で、純正な日本文なのだ、といわぬばかりな日本語が、どうにも我慢がならなかった。若者が、自分の身について家からうけたと自信している日本的教養にてらしてみても、我慢がならなかった。あげく、ぐっと我慢をして、〝精神病〟のままでゲラをおろした。翌月、保田与重郎は編輯部へ呶鳴り込んで来た。若者は、当然編輯の人に呶鳴りつけられた。が、平気だった。また、後者では、写真製版が多かったから、平版というもの

の厄介になることが屢々だったのだが、これをヘイハンと発音するのが、なにかしら汚ならしくて、これもどうしてもいやだった。ひらばん、と言った方がいい……。その方が日本語としての実感も、従って品位もある、とどうしてもそう思われた。だから、編輯長から何度呶鳴りつけられてもひらばんで頑張った。その年いっぱいで、このわりに実入りのいい、しかも映画女優などというものがしきりに挨拶に来る、なかなかに面白い仕事をやめたのは、他にも理由はあったが、ひらばんでもって妙な頑張りを頑張ったせいがあった。呶鳴る編輯長も、なんとも頑固なじじいであった。どうしても、ヘイハン、と言え、と言ってきかなかった。そのほかに、やはり赤鬼君や澄江君たちの芝居を手伝って知り合った女子大学生の英文リポートを書いてやることなどは、英文学のことなどろくに知らなくても、そう手間暇のかかることではなかった。もう踊り子たちの蹴りたてる埃を吸ってドンドンプカプカをやることもなかったのである。それに、ドンドンプカプカのなかにも軍歌が大量に入って来て、あの短調の、哀しい軍国歌謡を自分で演奏することなどは御免であった。自分でやれば、やはり、酔う……。本を買うことにも不自由しなくなっていた。それに、英語の本でも、仏語の本でも、古本屋に、かなりに出廻っていた。古本屋が、

「出征して行く人が多いですけん」

と言った。

十一月もおしつまったある夜、フランス語の先生のところから帰って来て、ぼんやりと机に向っていた。眼の下には、例の、こってりとした、アンリ・ド・レニエの『ヴェニス物語』をおいておいたが、それを復習しているわけではなかった。荻窪の小説家の先生も、阿佐ヶ谷の小説家の先生も、さっといなくなってしまっていた。フランス語の先生は、しきりに奥さんを督促して

留守を見舞わせていたが、若者に対しては、その消息のことなど、ひとことも言わなかった。むしろそういう話題を避けたい、というふうが見えた。若者にとっても、そんならそうで、それでよかった。

がしかし、世間全体の空気が、なにかしら変だった。空気が薄くなって行くみたいな、妙に透明になって行くみたいな、息苦しいというのではない……。息苦しいというのではないが、どういえばよいのか、息をする必要がなくなって行くみたいな……。それでいて人々は、なにかしらこそこそと――こそこそとあちらこちら駈けまわっていて――いや、息をする必要が、ないというよりも、妙な具合で平常心といったものが要らなくなって行くような……。

『いったいなにが起っているんだろう……？』

そう考えて、若者はぼんやりしていた。尻の方がこそばゆいような感じもある。

ぼんやりしていると、ぺたぺたと階段を上って来る足音がして、

「どうやいね……？」

と声をかけて、お婆さんが板戸を引いて若者の部屋をのぞき込んだ。

どうやいね、とは……。なにがどうやというんや……。第一、若者が部屋にいるとき、お婆さんがのぞくなどということも、それまではまったくないことだったのだ。ふり向いて見ると、お婆さんは、肩に白布をかけて、白髪染めを半分つけおわったばかりの、半分黒くて半分は胡麻塩という、なんともおかしなアタマでのぞき込んでいる。

「お婆さんこそ、そんなアタマで、どうやいね……？」

「うん、それがや。アタマ染めとったら急に気になってな、お前様……」

と言ってお婆さんが部屋へ入って来た。若者が大学生になるまでは、お婆さんは若者を、あんた、と呼んでいたが、大学生になってからは、お前様と呼ばれていた。

「お前様、あのな……」

と珍しく口籠り、そこらにちらかった本をのけて若者の横にペタリと坐った。そうして坐るなり、思わぬ大声を発して、

「戦争になるがやないけ！」

と、若者がおどろいて飛び上りそうな大声で、お婆さんが、ほとんど、嗔鳴った。

「ああびっくりした！」

「アタマ染めとったら急に気になって来たんや」

「……そうかもしれんな」

と若者は低い声で、考えながら答えていた。荻窪の小説家の先生や阿佐ヶ谷の小説家の先生たちはどこへ行ったのだろうか。阿佐ヶ谷の先生は、望み通りにシナへ行ったろうか。

お婆さんは、背をまるめて下から上目づかいで若者を見上げ、

「そうけ……、やっぱりなあ」

と言った。

そうして、それだけ言うと、立ち上ってさっさと階段を下りて行った。

おそらく、今日この頃は、国民のほとんどぜんぶが、憑きもののようにしてこのことを考えているものであろうと思われた。

しかし、アメリカと戦争をはじめたら、いったいどういうことになるのか、若者の頭に最初に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton